



TITLE:

マレーシアにおける社会科学の形成と展開：「プルーラル」概念史

AUTHOR(S):

井口, 由布

CITATION:

井口, 由布. マレーシアにおける社会科学の形成と展開：「プルーラル」概念史. 東南アジア研究 2007, 44(4): 425-443

ISSUE DATE:

2007-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/53863>

RIGHT:

マレーシアにおける社会科学の形成と展開 ——「プルーラル」概念史——

井 口 由 布*

The Formation and Development of Social Sciences in Malaysia: A History of the Concept of “Plural”

IGUCHI Yufu*

This essay clarifies the post-colonial character of Malaysian social sciences by analyzing their historical formation from the viewpoint of the concept “plural.” It argues that concepts such as “plural society,” “multiculturalism,” and “cultural pluralism,” which often emerge in the analysis of Malayan and Malaysian society, are contained within the concept “plural.” This concept was produced during the development of Area Studies, which centered on the United States after World War II. It was relevant to the problems of national integration and modernization that were faced by most newly independent nation states. In this regard, “plural” was firstly interpreted as a lack of national integration and as an obstacle to modernization. In the 1980s, however, some Malaysian scholars tried to revise the concept under the rubric of Ethnic Studies. They proposed the possibility of integration and modernization while maintaining the “plural” situation. In the 1990s, a new conception of “plural” emerged that undermines and contaminates boundaries. It has the possibility of breaking out of the national framework, although scholars still use the concept within the framework of Malaysia. This essay shows that the concept of “plural” has varied with time, as well as with the individual scholar. In this regard, the formation of the social sciences in Malaysia is under negotiation between different ideas of “plural” and what it means for national integration and modernization.

Keywords: Malaysia, social science, nation state, plural society, plural, identity, colonialism, appropriation

キーワード: マレーシア, 社会科学, 国民国家, プルーラル・ソサエティ, プルーラル, アイデンティティ, 植民地主義, 領有

は じ め に

本研究はマレーシアにおける社会科学分野の形成史を「プルーラル plural」という概念を機軸にとらえかえすものである。¹⁾「プルーラル」概念は、ファーニヴァルの「プルーラル・ソサ

* 立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部; College of Asia Pacific Studies, Ritsumeikan Asia Pacific University, 1-1 Jumonjibaru Beppu City Oita Prefecture 874-8577, Japan
e-mail: yufuig@apu.ac.jp

1) 本論文は、博士論文「マレーシアにおける国民的『主体』形成」(東京外国語大学大学院地域文化)

エティ plural society」論をはじめとして、マレーシアに代表される新興国家における国民統合と近代化の成否を問題化するものであった。²⁾

「プルーラル」概念は、第二次世界大戦後にアメリカ合衆国を中心に展開された地域研究と緊密に関係している。マレーシアにおける社会科学の形成は、「プルーラル」概念をめぐる展開される、地域研究にたいする現地側からの「領有 appropriation」の過程としてみなしうものである。この場合の「領有」とは、「すでに存在する諸表象のなかからつごうのよいものを選択的にえらびとりみずからのものにすることによって、あらたな文化的主体を構築する作業」[林 2001: 27] を意味している。すなわち、植民地における「主体 subject」は本質主義的にして自律的なものではなく、むしろ植民地主義による抑圧を通じてはじめて作り出される。しかしながら、その「主体化」のプロセスは植民地主義をとおして形成された諸表象の一方的な内面化では必ずしもなく、諸表象の任意の取捨選択を含んでいるというのである。本論文では、「マレーシア＝プルーラル・ソサエティ」という表象が、合衆国主導の地域研究によって一方的に作り出された支配的表象というよりも、むしろマレーシア側が任意の取捨選択をとおして作り上げてきた自国論としての側面が強いことを、この「領有」概念をとおして明らかにする。

本研究における問題意識は、基本的には1990年代後半からのマレーシアの社会学者による植民地主義的な知にかんする問題提起を引き受けるものである。マレーシアにおける社会科学的な知の形成史における主要な論点の一つは、社会科学的な知と植民地主義との関連であった。たとえば、ルスラム・サニとノラニ・オスマンの共同論文「マレーシアにおける社会科学——批判的シナリオ」[Rustam and Norani 1991] は、植民地支配をこうむった地域における社会科学の歴史的な起源が、西洋による植民地支配によって作り出された社会的な条件にふかいかかわっていることを指摘している。かれらによれば、マレーシアにおける初期の社会科学的な著作は、一般にイギリスの植民地政府の官僚によって著されており、社会科学の発展は植民地政府のためのデータや情報提供の必要性をともなっていた [ibid.: 2]。このような指摘は、1990年代後半にはポストコロニアル批評との連関から、植民地主義的な支配が政治や経済だけでなく知や文化にもおよんでいるという視点へと受け継がれる。たとえばシャハリル・タリブ「植民地的知とマレーシア社会」[Shaharil 1997]、シャムスル A. B. 「植民地的知とマレー、マレー的なものの構築」[Shamusul 1996]、同「東南アジアにおける社会科学を講評する」

研究科、2004年3月）の一部分をもとに2004年10月23日東京大学において行った東南アジア史学会関東部会における口頭報告「マレーシアにおける社会科学の形成と『多』の多義性をめぐる考察」にもとづいている。報告のさいに各方面より得られた助言を参考に加筆修正を加えた。

2) ファーニヴァルの“plural society”は、日本語では「複合社会」と訳されることがある。「複合」は『広辞苑』では「2種類以上のものが合わさって一つとなること」である。“plural”は「複数」であり、「一つになる」という意味をふくまないことから、ここでは「複合社会」という訳語は使用しないことにした。

[Shamsul 2001] がそれである。シャムスルは植民地主義的な知の枠組みが脱植民地化した諸社会において、それとはわからぬほどに自然化されてしまう状況について論じている [Shamsul 1996: 3]。

本論文は、シャムスル、シャハリルが指摘するマレーシアにおける社会科学的知の形成と植民地主義のかかわりを、「プルーラル」概念を基軸に検討する。すなわち、「プルーラル・ソサエティ」論、「プルーラリティ plurality」「多文化主義 multiculturalism」「マルチ・エスニック社会 multi-ethnic society」といったマレーシアやマラヤを歴史的に論じるさいにたびたび登場する諸概念を、「プルーラル」という視点から整理しなおし、そこからマレーシア社会科学の形成における植民地主義的な性格とそれにたいする現地の側の領有のありようを明らかにする。

マレーシアを分析する社会学者たちは、「プルーラル・ソサエティ」や「マルチ・エスニック社会」などを構成する「プルーラル」な諸要素を示すためにさまざまな用語を使用している。「人種 race」「エスニック・グループ ethnic group」「コミュニティ community」などである。³⁾ おおのこの論者がその用語にこめた意味についてはできるかぎりそのつど言及するようにしているが、この論文における基本的な立場は、どの概念についても実体的な内容をともなった概念としては考えていないというものである。すなわち、いずれも言説による構成体であると考えられる。

I 「プルーラル・ソサエティ」概念の登場

統一体概念と社会科学の二重性

「プルーラル」概念からマレーシアにおける社会科学の形成史を追跡する作業に着手する前に、社会科学的知の主要な特徴について確認しよう。社会科学にあっては、個人 individual はその字義どおり分割不可能な最小の単位である。個人を一個の統一的単位として、その単位から想像されるのが、境界をもった統一体としての「社会」である。すなわち、統一体としての「社会」とは、分割不可能にして境界によって隔てられる可算的かつ有機的なボディであり、近代を定義づけ特徴づける概念の一つである。

社会科学は地球上のあらゆる「社会」にかんする普遍的原理の追求をその使命としている。このため、その原理に適合しない「社会」ならざる「社会」は、社会科学の「外部」として設定され、人類学のような「他者」の文化記述を行う学問分野の対象（たとえば「エキゾチック

3) 日本におけるマレーシア研究では「人種」「エスニック・グループ」「コミュニティ」という用語とならんで「民族」という用語がよく利用される。日本のマレーシア研究における「民族」の使われ方は、「多民族国家」という用語が示すように、「国民」と訳出される場合のある“nation”よりは“ethnic group”に相当している。

な東洋」や「オリエンタル」)として見なされてきた[伊豫谷 2002: 40]。ところが、二つの世界戦争と世界恐慌によってもたらされた総動員体制によって、科学的合理性の追求という社会科学の原理が合理的国家的統合とむすびついていくなかで、これまで社会科学の外部に位置づけられてきた地域が社会科学的な記述の対象とされるようになる[山之内 1995; 伊豫谷 2002]。こうして社会科学的管理支配の必要性の増大という状況を背景にして、植民地を支配し管理するための科学としての「植民政策学」や、独立を果たした旧植民地をひきつづき管理するための科学としての「地域研究」、それらを継承する新しい国民国家の社会科学が生み出された。これらの諸科学は、これまで「社会」とみなされてこなかった地域を社会科学的に理解するという矛盾を実行しなければならなかった。研究者たちがマレーシアという文脈において、このような矛盾をはらんだ計画のために利用したのが「プルーラル」という概念だったのである。

ファーニヴァルの「プルーラル・ソサエティ」論

J. S. ファーニヴァルの「プルーラル・ソサエティ」論は、そもそもは植民地統治下のインドネシアとビルマを直接の分析対象としていた。1939年に出版された『オランダ領インド』はいうまでもなく、第二次世界大戦後の著作『植民地政策と実践』[Furnivall [1948]1956]にかんしても、地域研究というよりは植民政策学の伝統のなかにある。⁴⁾

ところが、第二次世界大戦後の地域研究の発展のなかで「東南アジア」という地域概念が登場すると、ビルマとインドネシアにかんする「プルーラル・ソサエティ」論は、「東南アジア」地域における共通の概念としてとらえられるようになる。⁵⁾ すなわち「プルーラル・ソサエティ」論がマラヤにも適用されることが可能になった背景には、「東南アジア」という地域概念の形成がある。

まずはファーニヴァルの「プルーラル・ソサエティ」論そのものの特徴を四つの点から概観しよう。ファーニヴァルは『植民地政策と実践』[*ibid.*]において「プルーラル・ソサエティ」を「一つの政治単位のなかで隣りあわせに生活していながら、おたがいに混じりあうことのない二つないしそれ以上の要素 elements または社会秩序 social orders を内包するような社会

4) この場合の地域研究はもちろんアメリカ合衆国を中心としたものである。たとえば Hall [1947], 河部 [1951], 矢野 [1987; 1993] を参照のこと。

5) 通説では、「東南アジア Southeast Asia」という名称は、第二次世界大戦中に日本軍によって占領された地域を回復するため、軍事戦略上、統一的対策をとる必要から、1943年セイロンのコロンボに設けられた連合軍の「東南アジア司令部 South East Asia Command」に由来する。だが、ファイールド・ラッセルは、「東南アジア司令部」という名称が採用された背景には、戦後のアメリカ合衆国を中心とした東南アジア地域研究の礎の一つとなる民間の調査研究機関である太平洋問題調査会 Institute of Pacific Relations (通称 IPR) による広範囲にわたる活動があったことを指摘している[Russel 1975]。ラッセルによれば、1940年にウィリアム・ホランドが編集した太平洋問題調査会による研究報告書には「東南アジア Southeast Asia」という名称がすでにつけられていた。いずれにせよ、「東南アジア」という名称がとても新しいことが確認できるはずである。矢野 [1987; 1993] を参照のこと。

である」[*ibid.*: 304-305]と定義している。この定義から明らかなように、ファーニヴァルの「プルーラル・ソサエティ」論は、植民地の空間を可算的な分析単位としている。ベネディクト・アンダーソンが、第三世界における新しい国民国家が領土的には植民地時代の行政単位を継承しているということを指摘するように、植民地を一つの空間として認識するというこの方法は、国民的な共同体を想像することを導いていくものである[Anderson 1991]。

第二の特徴は、「プルーラル・ソサエティ」が「均質な社会」との対比によって描かれ、均質性を欠いた不完全な統一体としてみなされていることである。ファーニヴァルによれば、「プルーラル・ソサエティ」の最たる特徴は、「均質な社会」に内在するはずの共通意思が「欠如」していることにあり、その結果、「均質な社会」なら当然組織化されるはずの共通の需要が「プルーラル・ソサエティ」には「欠如」という[Furnivall [1939]1967: 448-449]。もちろん、諸要素の内部においても共通意思は形成されておらず、ファーニヴァルはこれらを「烏合の衆 crowd」[Furnivall [1948]1956: 307]とみなしていた。

第三の特徴は、ファーニヴァルのいう「プルーラル」が「人種」集団の並列的存在を示すのではなく、「人種」別に労働が分業されていることを意味しているということである[Furnivall [1939]1967: 450]。すなわち、共通意思の形成を妨げるのは、異なる「人種」というよりもむしろ労働分業のほうなのである。

第四の特徴は、「ネイティヴ」をふくめたすべての構成要素に資本主義とその経済的価値が浸透しているということである。それまで一般的には「ネイティヴ」たちは資本主義化しないと考えられていた。それにたいし、ファーニヴァルは植民地が完全に資本主義によって貫徹され、「ネイティヴ」たちでさえ利益最大化という価値を共有していると主張する[Furnivall [1948]1956: 308]。この新しい視点によって、ファーニヴァルの「プルーラル・ソサエティ」論は過去の「植民政策学」としてだけでなく、「地域研究」の時代においてもくりかえし利用されることになったといえる。

太平洋問題調査会とマラヤへの「プルーラル・ソサエティ」概念の適用

19世紀以来マラヤは、植民地経済の要請によってその内部に多数の移民をかかえていた。このことは現時点の研究からすれば自明のことである。しかしながら、R. J. ウィルキンソンの『マレー研究論集』をはじめとする20世紀初頭の研究では、マラヤは複数の移民集団から構成される「社会」とはみなされていなかった[Wilkinson 1907-1911]。⁶⁾ 移民社会が可視化されるようになったきっかけの一つは、ファーニヴァルの「プルーラル・ソサエティ」論がマラヤ

6) 移民社会がマラヤに形成されたのは19世紀であったが、植民地官僚でありかつマレー学者であったウィルキンソンが20世紀初頭において編集した『マレー研究論集』は、マラヤが「マレー人」と「アボリジニ」から構成されているという見方によって貫かれている[Wilkinson 1907-11]。この点についてくわしくは、井口[2004]を参照されたい。

にあてはめられたことであると考えられる。⁷⁾ この新しい見方を中心的に担ったのは、太平洋問題調査会 Institute of Pacific Relations であった。⁸⁾ 太平洋問題調査会は 1925 年に、学術・文化の交流を通じてアジア太平洋に関係する諸国間の友好促進をめざしてハワイで結成された民間の国際研究団体である。アメリカを中心に太平洋にかかわりのある 14 カ国（イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、フランス、オランダ、インド、ソ連、フィリピン、日本、中国、後のインドネシアとパキスタン）で構成された。おもな活動は隔年の国際会議の開催と雑誌『パシフィック・アフェアーズ』や調査報告書の刊行であった。財政的には個人の会費や寄付ならびに各国支部からの分担で賄われることが建前であったが、実際にはロックフェラーやカーネギー財団などの米国側の寄付に多くを依存していた。第二次世界大戦終了期までその研究は各国における政策立案に貢献し、とりわけ連合軍による日本占領政策には大きな影響を与えた。⁹⁾

1950 年に開催された太平洋問題調査会の第 11 回会議ラクノウ会議では、ウィリアム・マクマホン・ボールによって「極東におけるナショナリズムとコミュニズムにかんする覚書」という報告が行われ、マラヤが「人種」別の労働分業によって特徴づけられた「ブルーラル・ソサエティ」として紹介されている。

マレイ [ママ] は複合社会である。1947 年におこなわれた最近の人口調査によれば、マレイおよびシンガポールにはヨーロッパ人約一万八千人、ユーラシアン一万九千人しかいないのに対して、中国人百六十万九千人、マレイ人二百二十万三千人、インド人六十五万五千人がいる。マレイではマレイ人の数が最も多いが、シンガポールでは中国人はマレイ人のほぼ十倍もいる。中国人は主として商業と鉱山業にたずさわり、約三分の一ほどは農業と漁業を営んでいる。インド人の大多数はゴム園の労働者である。したがって、民族の相違は職業の相違に反映している。[日本太平洋問題調査会 1951: 57]¹⁰⁾

-
- 7) もちろん移民社会は植民地政府の管理対象であり、19 世紀末のセンサスの導入などにより、じょじょに可視化されてきたといえよう。とりわけマラヤの独立が現実の問題となりはじめると移民への市民権供与が重大な政治的問題となる。ファーニヴァルの「ブルーラル・ソサエティ」論はこのような情勢に呼応して登場したと見てよいだろう。
 - 8) 太平洋問題調査会についてくわしくは、日本太平洋問題調査会 [1951]、原 [1984]、片桐 [1983]、中見 [1985] を参照のこと。なお、ファーニヴァルの『植民地政策と実践』は太平洋問題調査会から出版されている。
 - 9) 戦後、オーウェン・ラティモアをはじめとして太平洋問題調査会の関係者たちは、マッカーシズムによる攻撃を受ける。このことから拠出金や寄付が減り、太平洋問題調査会は衰退する。
 - 10) ボールの報告は、日本太平洋問題調査会訳編『アジアの民族主義——ラクノウ会議の成果と課題』（1951）に収録されている翻訳によった。日本太平洋問題調査会の翻訳は、同会議に提出されたボールの討議資料（William Mccmahon Ball, Notes on Nationalism and Communism in the Far East.）にもとづいている。

また、同会議の「東南アジア」円卓討議においても、マラヤの問題は、「マレー人」「インド人」「中国人」という人口構成によってもたらされているとみなされており、これらの三つの「民族集団」を一つの市民へと融合させることがめざされなければならないとされる〔同上書：204-206〕。¹¹⁾「このディレンマがあるためにマレイでは大きなまたは重要な民族主義運動が形成されることを妨げられている。マレイ国民またはマレイ国家がつくられるかどうかはこの民族問題の解決如何にかかっている」〔同上書：206〕といわれるように、マラヤの「プルーラル・ソサエティ」は国民建設の障害としてとらえられているのである。

以上のように、太平洋問題調査会の諸研究では「プルーラル・ソサエティ」は、あるべき統一体にたいする逸脱ないしは遅れの状態として、超克されなければならない状態としてとらえられている。すなわち「プルーラル」であるということは、「均質な社会」にたいする「欠如」なのである。その原因は、なによりも「人種」別労働分業による経済格差であった。

II 「プルーラル・ソサエティ」論の定着

以上に見てきたように、「プルーラル・ソサエティ」は、統合が欠如した状態であり、近代化や国民統合への大きな障害とみなされた。マラヤは1957年に政治的に独立するが、当時の論者たちはその独立を「プルーラル・ソサエティ」状況の克服の成果であるとは考えていなかった。ここでは「プルーラル・ソサエティ」概念が賛否両論をとめないながらもマラヤ / マレーシア研究に定着する時期——1960年代から1970年代——を概観する。この時期における研究の担い手は、おもにイギリスやアメリカ合衆国出身の研究者たちであり、マラヤ / マレーシア地域出身の研究者たちはいまだ少数であった。

「三大人種 / コミュニティ / エスニック・グループ」という表象の誕生

マラヤは1957年にマレー半島という領土とともに独立し、その後1963年にはボルネオ島北部のサバとサラワク、さらにシンガポールとともにマレーシア連邦が成立する（ただし1965年にシンガポールは離脱）。独立と連邦成立に前後して、マラヤやマレーシアを冠する多くの論文や著作が出版された。¹²⁾ モーリス・フリードマンが「社会学者たちはそれ〔「プルーラル・ソサエティ」概念〕にいらだったり、賛同したりしている」〔Freedman 1960: 158〕と述べるように、「プルーラル・ソサエティ」論は賛否両論をひきおこしつつもこの時期のマラヤやマレーシアの分析にしっかりと定着していたことがうかがえる。

11) 報告はアメリカのIPR研究員であるL. S. フィンケルスタイン、司会はHyderabad Economy and Reorganization Committeeの議長でインド代表団のA. D. ゴーワラである。

12) たとえばFreedman [1960], Silcock [1961], Kennedy [1962], Tregonning [1964], McGee [1964], Ratnam [1965], Enloe [1970], Vasil [1971] を参照のこと。

フリードマンは「ブルーラル・ソサエティ」状態があくまでも植民地時代の特徴であり、独立を迎えたマラヤにおいてはおのおの「社会」のあいだには植民地時代ほどの強固な境界線はないとしている [*ibid.*: 167]。そう述べることによってフリードマンは、独立後のマラヤが統合の欠如としての「ブルーラル・ソサエティ」状態を脱しつつあることを暗に示すのである。

この時期に「ブルーラル・ソサエティ」概念がマラヤ / マレーシア研究に定着したことは、フリードマンの記述以外からもうかがうことができる。たとえばラトゥナムは「コミュニティ」という名称を使いながら、マレーシアが「マレー人」「中国人」「インド人」という三つのグループからなりたっているという議論を開始している [Ratnam 1965: 1]。ヴァシルはラトゥナムとは異なる「人種 *race*」という用語を利用しながらも、ラトゥナムと同様に、マレーシアが「マレー人」「中国人」「インド人」からなる「多人種社会 *multi-racial society*」であると説明するところから著書を開始している [Vasil 1971: 3]。ハーシュマンは、マラヤやマレーシアを「マレー人」「中国人」「インド人」という三つのグループから構成されている国であると説明する方法がすっかりルーティンとなっていることを指摘している [Hirschman 1987: 555]。¹³⁾

論者によって「人種」や「コミュニティ」など使用する用語は異なっているが、ここから、「ブルーラル・ソサエティ」論がマラヤ研究とマレーシア研究に導入されて以来、三つのグループからマラヤが構成されているという表象が成立してきたことが読みとれよう。¹⁴⁾ このような表象の登場は、「ブルーラル」であることがもつ問題性にたいする研究者たちによる折衝の結果であるといえるかもしれない。たしかに「ブルーラル」は、ファーニヴァルや太平洋問題調査会が示した「ブルーラル・ソサエティ」論のように、いまだ「欠如」を暗示している。しかしながら、「ブルーラル」のありようには少々変更が加えられるようになった。すなわちファーニヴァルにおいては、「烏合の衆 *crowd*」[Furnivall [1948]1956: 307]と描かれていたそれぞれの「要素」が、いまや「統一体」とみなされているからである。¹⁵⁾

13) 三つのグループという見方を使用している、筆者が確認できたもっとも古い例は、当時ハーバード大学の助教授であったルパート・エマソンの『マレーシア』[[1937]1964]である。エマソンはセンサスの分析からマラヤが「マレー人」「中国人」「インド人」からなると説明する。他方、マラヤ官僚でもあったリチャード・ウィンステッドの『マラヤとその歴史』[[1948]1966]では、マラヤを構成するのは「アボリジニ」「文明化したマレー人」「中国人」「インド人」「その他」である。

14) もちろん、おのおのの論者がどのような意味で「人種」や「共同体」、さらには「エスニック・グループ *ethnic group*」という用語を使用しているかについて検討することは重要である。しかしながら、ここでは紙幅の関係でじゅうぶんに説明することができなかった。くわしくは井口 [2004] を参照されたい。

15) たとえば Ratnam [1965] や Vasil [1971] におけるコミュニティと政治過程にかんする議論を参照のこと。ところで、それぞれの社会が統一体としてみなされることが、新たな問題を生みだしていることを忘れるわけにはいかない。統一体として考えられることによって統一体とみなされたものの内部の多様性が抑圧されるからである。また、「マレー人」「中国人」「インド人」という表象が、1963年のマレーシア連邦の成立後も引き続いて採用され続けることによって、マレーシアにかんする知におけるマレー半島中心主義を期せずして押し進めてしまう。つまり、サバ州とサラワク州における非イスラム教徒でマレー語を話さない多数の先住民たちの存在は無視されてしまうのである。

エスニシティ研究の導入

太平洋問題調査会にかかわる研究者たちが提示した、均質性を欠いた「プルーラル・ソサエティ」マレーシアという支配的な見方にたいする研究者たちの交渉は、その後もつづけられた。1970年代ごろから問題になったのは「人種」という問題含みの概念である。ファーニヴァルの示した「人種別」労働分業は、特定の「人種」と経済発展の能力を必然的に結びつける議論として理解されるさい、第三世界の新しい国民国家における近代化の可能性を排除することにもなりえたからだ。

「プルーラル」であることの問題性を「人種」問題として語ることへの批判は、「エスニシティ」という概念の導入によってなされた。ミルトン・ゴードンなどによって1960年代末からアメリカ合衆国において展開した「エスニシティ」概念は、シンシア・エンルーやジュディ・ス・ナガタらアメリカ合衆国において専門訓練を受けた研究者によって1970年代からマレーシアの分析に適用され、1980年代にはマレーシア出身の研究者たちによっても大いに利用されるようになった〔Gordon 1964; Enloe 1970; Nagata 1979; Syed Husin Ali 1984〕。たとえばエンルーは、「人種」を「エスニック・グループ」の下位カテゴリーとして、「文化」などとともに「エスニシティ」を決定する変数の一つとして利用している。彼女にとっての「人種」は生得的な外見をあらわす指標にすぎず、そのような外見と能力には本質的なつながりはない〔Enloe 1970: 9, 28〕。また、サイド・フシン・アリはマレーシアで「人種」と呼ばれているグループが「人類学者や遺伝学者の分類する三大人種という人種論」においては同一「人種」のなかに分類されてしまうことを指摘し、「人種」という用語がマレーシア社会の分析に不適切であると述べている〔Syed Husin Ali 1984〕。

マレーシア分析に「エスニシティ」概念が導入されたのは、1969年の「人種暴動」の記憶も新しい時期であると同時に、アジアにおける経済成長と近代化の可能性が明確に見えてくる時期でもあった。エスニシティ研究が定着する1980年代には、「人種別労働分業」と表象されていた状況がかなりの程度克服されているという認識がひろまった。そこで、「プルーラル」であることの問題性を「人種別労働分業」よりむしろ文化に求める主張がしだいになされるようになる。タン・チーベンがマレーシアの国民統合の問題点を「エスニズム」にあると述べるのは、このような事情を背景にしているといえよう〔Tan 1984: 210〕。

以上のように、マラヤないしはマレーシアを、統合の欠如を意味する「プルーラル・ソサエティ」としてではなく、「三大人種 / コミュニティ / エスニック・グループ」と表現することは、「プルーラル・ソサエティ」論における「人種別労働分業」という問題に修正や変更を加えたり、あるいは批判したり、問題そのものを回避する方法を生み出していったといえるだろう。「三大人種 / コミュニティ / エスニック・グループ」という表現方法は「プルーラル」であることの原因を「人種」問題、経済的問題、文化的問題などに多様化した。ただし、「プルーラル」

であることを「欠如」とする「プルーラル・ソサエティ」論におけるもっとも優勢な考え方は1970年代をとおして残っていた。

III 「プルーラル・ソサエティ」論を領有する

これまで見てきたように、「プルーラル」であることはマラヤ/マレーシアを主題とする社会科学の知の形成におけるひとつの逆説であった。というのも、「プルーラル・ソサエティ」は統合が欠如していることを意味するために、マラヤやマレーシアが統一体としての「社会」であるといった主題じたいが成立しない可能性を導いてしまうからである。そこでマラヤ/マレーシアを主題とする社会科学は、その主題を成立させるために、「プルーラル・ソサエティ」であることを解決するための学として形成されていくのである。

1980年代は、マレーシア研究にマレーシア地域出身者が台頭してくる時期である。ルスタム・サニとノラニ・オスマンが述べるように、欠如としての「プルーラル・ソサエティ」状況の克服は、マレーシアの社会学者たちが社会科学をみずからのものにするプロジェクトでもあったのである[Rustam and Norani 1991: 2]。

「プルーラル」の否定的イメージ——「一」をめざす

国民的な統一体を構想しようとするプロジェクトは、多くの場合において、言語、文化、人々、経済などのさまざまなレベルの統一体の輪郭を、マレーシアという国家の境界線と完全に重ねあわせようとする方向でなされた。そのような「一」をめざすプロジェクトの一つとして、近代化があげられよう。「プルーラル・ソサエティ」が、経済発展した近代的で同質な社会との対比の図式のなかに位置づけられるとき、近代化は、「プルーラル」であるという状況をのりこえる一つの方策として構想されたのである。

一般に近代化論では、「エスニック」な対立は前近代的な愛着の遺物としてみなされる。¹⁶⁾ この主張にあっては、近代的にして普遍的な価値に同化すれば、「エスニック」な対立は解消され、経済格差が是正されて国民統合が達成される。しかしながら、1980年代におけるマレーシ

16) 関根政美がゴードンを援用して説明するところによれば、産業社会論（インダストリアルイズム論）や社会・政治近代化論は「就職や結婚の際に、人種・民族・エスニシティや身分や家柄などの属性的要素が重視される伝統ないしは前近代社会から、工業社会になるとマス・メディアや交通機関が発達し、情報と人びとの移動が活発化し、機能的合理性とアーバニズムを中心とする都市・産業社会が発達する結果、人々は合理的・機能的思考態度や都市的生活様式、さらに、業績主義と機会均等（equality of opportunity）主義や平等主義と反差別主義を求める『リベラルな期待』を身につける」[関根 1994: 55]と説明する。またグレイザーとモイニハンの『エスニシティ』は、近代化が原初的な primordial 差異を解消するとみなしている点ではマルクス主義も同様であると説明している [Glazer and Moynihan 1975: 7]。

ア社会学者たちは、近代化論のなかに巧みに隠された支配関係を読みとっていた。かれらは、国民統合がなされない「プルーラル・ソサエティ」状況の原因を、経済植民地主義と階級対立に見たのである〔Tan 1982; Syed Husin Ali 1984; Sanusi Osman 1984〕。そこでは、「エスニック」な対立は、ほんとうの対立——階級対立——を隠蔽する虚偽意識としてみなされた。すなわち、経済植民地主義は、その支配形態と搾取形態を「エスニック」対立に偽装しているというわけである。サイド・フシン・アリによれば、マレーシアにおいて「エスニック・グループ」別労働分業を見ることはできず、労働の分業は「エスニック・グループ」を横断している。しかしながら、マレーシアが「プルーラル・ソサエティ」=「人種」別労働分業社会であると主張することによって、本来の階級対立が隠蔽されてしまうという〔Syed Husin Ali 1984: 25, 30〕。

「一」をめざすプロジェクトの第二としてあげられるのは、西洋近代の「普遍性」との対比によって表象される「特殊性」の強調である。マレーシアの文脈においては、「マレー的なもの」や「イスラム」があげられよう。植民政学は、東洋対西洋という優劣の判断をともなった二項対立の図式をもちいながら、「マレー的なもの」を発見した。植民地支配の圧倒的な力関係のもとで、被植民者たちは、そうした知の図式を内面化して「主体」形成せざるをえなかった。このような知的背景において、独立期のマレー人保守層が、国民国家マラヤを「マレー的なもの」を軸にしなが、マレー半島という領土、マレー人、マレー語といったそれぞれの統一体の輪郭に重なりあうものとして構想した。¹⁷⁾ そのような構想では、移民たちは当然マジョリティに同化しなければならないと考えられた。

しかしながら、これまでにみてきたように第二次世界大戦後の地域研究的な認識枠組みのなかでは「プルーラル・ソサエティ」という見方が優勢となり、「マレー的なもの」はマジョリティとしてではなく、「三大人種 / コミュニティ / エスニック・グループ」の一つとして理解されるようになったのである。「三大人種 / コミュニティ / エスニック・グループ」という見方が優勢である状況のもとで、「マレー的なもの」が「一」をめざすための原理となるためには、「マレー的なもの」は「特殊」でなく「普遍」である必要がある。そこで「普遍」としての「マレー的なもの」は、過去に設定されることとなる。ここでワン・ハシムによる植民地時代以前のマラヤについての説明を見ておこう。

ファーニヴァルのプルーラル・ソサエティという概念は、植民地主義のもたらしたものをおもに経済の力にかかわらせている。彼が強く主張するのは、植民地時代以前には東洋の

17) たとえば、マレー語をマラヤ唯一の国語とすることを主張する言語書籍局Dewan Bahasa dan Pustakaの雑誌『言語局 *Dewan Bahasa*』の編集記に端的に見られる。くわしくは井口〔2002b〕を参照のこと。

社会が共通の意思によって統一されていたということである。彼がいうには、植民地時代以前のマラヤはブルーラルな特徴をもっていたがブルーラル・ソサエティではなかった。疑うまでもなくそこには、ジャワ、スマトラ、アラビア、インド、中国を出身地とするいくつかのエスニック・グループが存在したが、これらの人々はべつべつに分離したマイノリティ集団をつくっていなかった。彼らは支配的な社会に同化されていたのである。〔Wan Hashim 1983: 19〕

ワン・ハシムは、植民地時代以前のマラヤ社会は、さまざまな集団の同化の結果であるとはいえ、「均質な社会」ではなく「ブルーラルな特徴をもった社会」であるという、一見すると矛盾した見方を提出している。だが、この状況が矛盾なく理解されるためには、支配的な社会が「普遍」である必要がある。すなわち、ほかのマイノリティ集団を超越する原理として「マレー的なもの」が提示されなければならないのである。じつはここでワン・ハシムが暗に前提としているのは、植民地時代以前のマラヤでは、「マレー的なもの」は「ブルーラル」な諸集団を超越した「普遍」的な統合原理であったが、植民地支配がかつてあった「普遍」としての「マレー的なもの」を奪ったということなのである。

「普遍」としての「マレー的なもの」を過去に設定するというこの統合プロジェクトは、基本的には「ブルーラル」から「一」をめざすものである。しかしながら、「普遍」としての「マレー的なもの」が、均質性ではなく依然「ブルーラル」をともなっていることには、注意しなければならない。「普遍」としての「マレー的なもの」は、均質で首尾一貫した超歴史的な統一体とは異なるイメージで描かれている。すなわち「マレー語」は、植民地支配以前の商業の時代におけるマレー諸島全域で通用するリング・フランカとして、マレー半島は、世界中からやってきたさまざまな人々が出会い、交渉し、交易を行うプラットフォームとして構想される。その結果、「ブルーラル」にはいつしか新しい解釈がもたらされることになる。

すなわち「普遍」としての「マレー」を描こうとすることが、結果として「ブルーラル」にかんする否定的なイメージの転換をせまっているのである。「ブルーラル」であることは、統合の「欠如」という否定的なイメージだけでなく、「ブルーラル」でありながらも統合する可能性があるという新しいイメージを持つことになったのである。それは、マジョリティへの同化をこえて、文化多元主義 cultural pluralism や多文化主義 multiculturalism へと道を開くものともいえるだろう。

「ブルーラル」の肯定的イメージ——「ブルーラル」の集合体としての「一」

1980年代のマレーシアにおけるエスニシティ研究の隆盛は、「ブルーラル」にかんする新しいイメージを導くことになった。すなわち「ブルーラル」は、これまでの超克されるべき否定

的なイメージから肯定的なイメージへと転換を果たすのである。それは、複数の統一体の並存による統一された国民共同体という新しい構想——文化多元主義さらには多文化主義——の登場によって明確な輪郭をもった。多元主義的な構想によって、「プルーラル」であるということが、そのまま統一体の「欠如」を意味しなくなったのである。

多元主義的な構想では、マジョリティ社会や西洋近代などに同化する必要や、「るつぽ melting pot」のようにそれぞれの集団が融合して新しい一つの集団をつくる必要はなく、おのおのの集団が、その文化的な特徴を保持したまま国民的な統合を遂げる。すなわちこの構想は、複数の統一体の並存としての一つの統合された国民共同体を示す。タン・チーベンはこの点を K. J. ラトゥナムの議論をつかってつぎのように整理している。

一般的にいて、国民統合を達成するには二つの方法がある。一つは同化 assimilation であり、もう一つは応化 accommodation である。同化は政治的に優勢な集団（通常は数のうえでの優勢）が少数集団を同化させるという統合の究極的な形態である。応化は、ある国の各エスニック・グループがみずからの文化的エスニック的なアイデンティティを維持しながら、国民統合の必要性をみとめ、その目的のために社会・文化的に、さらに政治・経済的な順応を行うことである。[中略] 応化と同化の主たるちがいは、前者が文化多元主義 cultural pluralism の現実を認めているのに対して、後者がそれを根絶しようとしているところである。[Tan 1984: 202]

それでは、多元的な状況すなわち統一体が複数存在するという状況を抑圧することなく、一つの国民的な統合体を制作するためには、なにが必要だろうか。タンが述べるように、必要なものは、プルーラルなそれぞれの統一体を超越した存在なり原理であり、ファーニヴァルのいう意味での「共通意思」である [Tan 1982: 37]。その意味で、マレーシアにおける文化多元主義は、論理的には「近代西洋の普遍性」を理念として掲げることも、ワン・ハシムが述べたように「マレー的なもの」を掲げることも、モハマド・アブ・バカールのように「イスラムの普遍性」を掲げることもできるのである。

同化やるつぽ化が、多元的な状況を抑圧して「一」をめざす運動だとすると、多元主義はどうだろうか。多元主義は、複数の統一体を前提として、それらを抑圧せずに、共通の国民的原理のもとで「一」をめざすとされる。少なくとも、多元主義においてそれぞれの統一体はマジョリティの文化に強制的に同化する必要はないかもしれない。しかしながら多元主義のもとでは、複数の統一体として前提とされるおのおのの集団は同質であるはずだとみなされる。そのようにみなされることによって、それぞれの集団の内部にある雑種性、さらには集団をまた

がった雑種性はあるべき同質性からの逸脱とみられ、差別や排除の対象とされることにもなる。

また、タンが述べるように、多文化主義が複数の集団を超越する原理を必要とし、国民統合をめざすものであるならば、それはやはり「一」をめざす構想であるといえよう。その意味において、多元主義的構想とは「一」としての国民をめざす、まさに近代的な「主体」化ないしは同一化のテクノロジーである。

もちろん、統一体という思考にかんする違和感はさまざまなところで表明されている。たとえば、タンは、マレーシアにおいては「文化多元主義」の前提として固定的で不変のエスニック・グループがあるわけではないと述べる [Tan 1984]。マレーシアのおおののエスニック・グループは何世代にもわたる接触をとおして、さまざまな文化変容をおこしているからだ。だが、統一体という概念枠組みが経験的に帰納されたものというより経験に先行するものであるため、倫理的な要請としての統一体という発想においては、実証研究におけるさまざまな例外や反証は、それがどれだけ積み重なろうと枠組み自体を解体することはない [酒井 1996: 171]。枠組みはそのつどそのつど変形してみずからを修正させていくのである。それでは、「プルーラル」が「プルーラル」のままであることは可能なのだろうか。統一体を志向せよという近代の命令をのりこえることはできるのか。

IV 統一体なき「プルーラル」の可能性

新しいアイデンティティ概念の登場

1980年代においてマレーシア研究を担ったマレーシア地域出身の研究者たちは、これまで否定的に評価されていた「プルーラル」の意味を修正し変更させるための格闘を行った。その結果、統合の欠如、国民化と近代化への障害としての「プルーラル」概念が変容をきたし、「プルーラル」なままの統合という肯定的な意味合いを付与することに成功した。そこでは西洋近代の「普遍性」にたいするさまざまな異議申し立てがあったといえよう。しかしながら、統一体という思考そのものが問題化されるのは1990年代以降であった。

統一体という考え方そのものへの疑念は、マレーシアにおけるエスニック・アイデンティティの研究においてなされた。そこでは、「多文化主義」か「同化」か、というだけでなく、アイデンティティという概念そのものを問いなおす視点が加えられるようになった。たとえば、シャムスル A. B. は、アイデンティティにかんする概念的な挑戦があると述べている。すなわち『『静的な』ものとしてアイデンティティをみなす方法、すなわちアイデンティティの意味とは『所与で』『既成で』それゆえ『あたりまえである』というもの』にたいして、『『動的な』ものとしてアイデンティティをみなす方法、すなわち『アイデンティティ』の意味はつねに変化

する現象としてみられ、それゆえ、再定義され、再構築され、再構成され、変化を加えられるがゆえに問題化されるというもの」[Shamsul 1996: 8]が登場しているというのである。¹⁸⁾ シャムスルが言及するこの「新しい」アイデンティティ概念は、本質主義的で超歴史的な統一体を批判し、歴史性を導入している。

マレーシアにおいて構築主義的なアイデンティティ論が登場した背景には、冷戦の終結とグローバル化状況の進展がある。しかしながら、アイデンティティの流動性の主張が、グローバル化とともに、社会科学における国民国家中心の統一体的思考にあらがうというように結論を急いではならない。伊豫谷登士翁が、グローバル化と国民国家体制が二者択一的な問題ではないことを指摘するように、グローバル化の脱領域的運動は、じつのところ、領域性によってなりたつ国民国家的な制度によって下から支えられている [伊豫谷 2002]。¹⁹⁾ シャムスルらの新しいアイデンティティ概念がマレーシアという国民国家体制のなかで構想されていることを考えてみれば、流動性や構築性がただちに国民国家を基盤とした統一体的思考をうち破るのではないことがわかる。

2000 年以降の状況

2001 年夏にマレーシア国民大学において開催された、マレーシア社会科学学会による第 3 回国際マレーシア学会議では、「マレーシアにおけるプルーラリズム」という題名のメインパネルが行われ、「プルーラリズム」にかんする多様な解釈が繰り広げられた。²⁰⁾ 「プルーラル」という言葉から喚起されたイメージは論者によってみごとに異なっていたといえる。その結果、議論は錯綜し、絡み合い、賛同と混同と誤解が入り混じった。パネルでの解釈は、大きく三つに分けることができる。第一の解釈では、「プルーラル」であることは、あるべき均質で統一体的な状態を逸脱していることを意味する。本論文でいえば、たとえば太平洋問題調査会などが提示

18) 構成主義的な観点からアイデンティティ概念をとらえるものとしては、たとえば、1996 年 10 月 9 日に京都大学の東南アジア研究センターが主催した「マレーシアにおける国家、経済、アイデンティティ」という特別セミナーや、それをもとにザワウィ・イブラヒムによって編集された雑誌『東南アジア研究』の特集号「変容するマレーシアにおいてアイデンティティを調停する」[Zawawi Ibrahim 1996] がある。

19) 脱国民国家的な研究や脱領域的な研究がまったくないということをいっているわけではない。問題はこのような脱領域的な志向をもつ研究であっても、国民国家や東南アジアなどの世界地域という空間的枠組みの支配力から簡単に逃れられないことである。

20) これは、マレーシア国民大学 UKM のマレー世界/文明研究所 Institut Alam dan Tamadun (ATMA) 主催のパネルで、議長は ATMA の所長であるシャムスル A. B. ディスカッサントは同じく ATMA のサイド・フセイン・アラタスである。パネラーはマレーシア内外からの 5 人で、ロバート・ヘフナー（ボストン大学）、ヤオ・ソウチョウ（シドニー大学）、ウェンディー A. スミス（モナッシュ大学）、ザワウィ・イブラヒム（サラワク・マレーシア大学（当時））、ジム・コリンズ（ATMA, マレーシア国民大学）である。このパネルについてくわしくは、井口 [2001b] を参照のこと。

した解釈である。第二の解釈は、「文化多元主義」や「多文化主義」などの考え方を思いおこさせるもので、複数の統一体が集まって、より大きな統一体を構成している状態である。本論文でいえばタン・チーベンなどの1980年代のエスニシティ研究のなかで登場した考え方である。第三の解釈では、「プルーラル」であることとは、統一体的なものの境界線を汚染し、掘り崩し、統一体的な思考それじたいを超克する「雑種性」である。1990年代に登場した新しい考え方を反映しているといえる。「プルーラル」概念から概観した第3回国際マレーシア学会議は、本論文で追ってきたさまざまな「プルーラル」概念のせめぎあいであった。

2006年8月8日から10日にかけてマレーシア・プトラ大学において行われた第5回国際マレーシア会議では、論争含みの「プルーラル」概念ではなく、「ロジャック rojak」という新しい用語が登場した。この用語がたびたび登場したのは、シンガポール大学のチュア・ベンファットやマレーシア国民大学のザワウィ・イブラヒムらが企画した「マレーシアのポストコロニアル大衆文化」という二つのパネルにおいてであった。「ロジャック」という言葉をもっとも積極的に使用したのはマレーシア科学大のタン・スイベンである。彼女は、「私たちは『ロジャック』を愛している We love Our “Rojak”」というタイトルで、複数の言語がミックスした「バハッサ・ロジャック bahasa rojak」²¹⁾によって歌われる「ロジャック・ソング」と呼ばれるポピュラー音楽を分析した。あるロジャック・ソングでは福建語からマレー語、マレー語から英語、英語からマレー語というようにフレーズごとにつぎからつぎへと歌詞に使われる言語が変化する。日本語のなかにときおり英単語がまじる日本のポピュラー・ソングとは異なり、タンの紹介したロジャック・ソングは、どの言語がその歌詞のメインなのかが判然としないような構成をとっている。

タンは「ロジャック」概念をくわしく説明したわけではないが、この概念は示唆に富んでおり、これからのマレーシア社会科学における有用な概念となる可能性を保持しているようにみえた。そもそも「ロジャック」とはマレーシアの大衆的な食べ物の名前であり、乱切りにしたさまざまなフルーツや野菜を唐辛子の入った甘辛いソースで和えたものである。「ロジャック」は、器のなかですべての要素がとけあう「るつぽ」ではない。乱切りされたそれぞれのフルーツや野菜は「エスニック・グループ」の比喩表現だが、それぞれのフルーツや野菜はそれだけでは意味をなさない。その意味では、「ロジャック」は、それぞれの「エスニック・グループ」が統一体とみなされる多文化主義や多元主義とは趣を異にしている。他のフルーツや野菜とまざってソースをかけられてはじめて「ロジャック」という食べ物となるところは、「サラダ・ボール」という比喩にも似ている。「サラダ・ボール」と同様に、「ロジャック」も国民国家という一つの皿

21) bahasa はマレー語で「言語」の意味である。タンによればマレーシア政府は2004年4月以来マレー語の歌詞に英単語をちりばめた歌を放送することを禁止した。政府はバハッサ・ロジャックがマレー語を墮落させると考えているようである。

に入った統一体のようなもので、共通の国民的理念とでもいうべきソースがかけられていると解釈することができる。しかしながら、タンら、マレーシアにおけるカルチュラル・スタディーズやポストコロニアル研究の研究者たちが着目しているのは、「ロジャッ」がもつ大衆性や雑種性のようなものである。「ロジャッ」は政府が積極的に保護したくなるような国民的伝統食ではない。「ロジャッ」は、立派な陶器の皿ではなく使い捨てのプラスチック容器にいれられ、屋下がりの道路端の屋台で食される、どこまでいっても大衆的な食べ物なのである。以上のことを考えると、いまだ錬成された概念ではないものの、「ロジャッ」概念は、社会科学における統一体的な思考を乗り越えようとする 1990 年代以来のこころみの延長線上に位置づけられるといえよう。

む す び

本論文では、「プルーラル」という概念からその当時の社会科学的な研究の特徴を時代順に検証した。とはいえ、こうした時代区分による説明にはもちろん限界がある。ある時代の特徴が過ぎの時代に跡形もなく消滅してしまうということはないからだ。2000 年代のマレーシア研究の特徴でも明らかなように、それぞれの特徴は時代を横断しており、あるいは同一の時代に複数の傾向が同時に存在し、さらにはからみあっている。すなわち、マレーシアにおける社会科学は「プルーラル」というそれじたいが多義的な概念によって特徴づけられてきたといえるだろう。社会科学における統一体的思考にたいして対抗的で挑戦的にみえる「プルーラル」という概念は、統一体という強力な近代的思考にたいする矛盾と両義性をみせつつ、じつのところ共犯性を保ってきた。その意味において「プルーラル」は、マレーシアの社会科学をまさに国民的社会科学に形成するための装置である。だがその一方で、1990 年代以降登場してきた新しい「プルーラル」概念は、本質主義的で超歴史的な統一体という考え方を批判的に考察しつつ新しい見方を提起する可能性を秘めている。

参 考 文 献

- Anderson, Benedict. 1991. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. London: Verso.
- Emerson, Rupert. [1937]1964. *Malaysia: A Study in Direct and Indirect Rule*. Kuala Lumpur: University of Malaya Press.
- Enloe, Cynthia H. 1970. *Multi-Ethnic Politics: The Case of Malaysia*. Berkeley: University of California.
- Freedman, Maurice. 1960. The Growth of a Plural Society in Malaya. *Pacific Affairs* 30(2): 158–168.
- Furnivall, J. S. [1939]1967. *Netherlands India: A Study of Plural Economy*. Cambridge. (ファーニヴァル, J. S. 1942. 『蘭印経済史』南太平洋研究会 (訳). 東京: 実業之日本社)
- . [1948]1956. *Colonial Policy and Practice*. New York: Institute of Pacific Relations.

- Glazer, Nathan; and Moynihan, Daniel P., eds. 1975. *Ethnicity: Theory and Experience*. Cambridge, Massachusetts and London, England: Harvard University Press.
- Gordon, Milton M. 1964. *Assimilation in American Life: The Role of Race, Religion, and National Origins*. New York: Oxford University Press.
- Hairi Abudullah. 1976. Aliran Kini dalam Antropologi, Saikologi dan Sosiologi di Malaysia. *Akademika* 6: 63-85.
- Hall, Robert B. 1947. *Area Studies: With Special Reference to their Implications for Research in the Social Sciences*. New York: Social Science Research Council.
- 原 覚天. 1984. 『現代アジア研究成立史論——満鉄調査部・東亜研究所・IPRの研究』東京：勁草書房.
- 林 みどり. 2001. 『接触と領有——ラテン・アメリカにおける言説の政治』東京：未来社.
- Hirschman, Charles. 1987. The Meaning and Measurement of Ethnicity in Malaysia: An Analysis of Census Classification. *Journal of Asian Studies* 46(3): 555-582.
- 井口由布. 2001a. The Colonial Look in the Papers on Malay Subjects. 『言語・地域文化研究』（東京外国語大学大学院，大学院博士後期課程論叢）7: 39-49.
- . 2001b. 「プルーラリズムをめぐる多元的状況——第3回国際マレーシア学会議から考える」『JAMS News 日本マレーシア研究会会報』第21号: 14-17.
- . 2002a. 『『主体』形成とマレー語の位置』『言語・地域文化研究』（東京外国語大学大学院，大学院博士後期課程論叢）8: 137-152.
- . 2002b. 『『複合社会』をのりこえる』『工学院大学共通課程研究論叢』（工学院大学）40(1): 41-54.
- . 2004. 「マレーシアにおける国民的『主体』形成——地域研究批判序説」博士論文，東京外国語大学大学院地域文化研究科.
- 伊豫谷登士翁. 2002. 『グローバリゼーションとは何か——液状化する世界を読み解く』東京：平凡社.
- Judistira K. Garna; and Rustam A. Sani, eds. 1990. *Antropologi-Sosiologi di Indonesia dan Malaysia: Teori, Pengembangan dan Penerapan*. Bangi: UKM Press.
- 片桐康夫. 1983. 「太平洋問題調査会の軌跡」『群馬県立女子大学紀要』3: 93-109.
- 河部利夫. 1951. 「地域学について」『東京外国語大学論集』65-74 ページ所収.
- Kennedy, J. 1962. *A History of Malaya*. Kuala Lumpur: S. Abdul Majeed & Co.
- McGee, T. G. 1964. Population: A Preliminary Analysis. In *Malaysia: A Survey*, edited by Wang Gungwu, pp. 67-81. Frederick A. Praeger Publishers.
- Mohd. Abu Bakar. 1984. Islam, Etnisiti dan Integrasi Nasional In *Kaum, Kelas dan Pembangunan Malaysia*, edited by Syed Husin Ali, pp. 139-168. Kuala Lumpur: Persatuan Sains Sosial Malaysia.
- Nagata, Judith, ed. 1979. *Malaysian Mosaic: Perspectives from a Poly-ethnic Ethnic Society*. Vancouver: University of British Columbia.
- 中見真理. 1985. 「太平洋問題調査会と日本の知識人」『思想』728: 104-127.
- 日本太平洋問題調査会（訳・編）. 1951. 『アジアの民族主義——ラクノウ会議の成果と課題』東京：岩波書店.
- Ramasamy, P. 1983. The State of Social Sciences in Malaysia: A Brief Historical Review. *Ilmu Masyarakat* 4: 67-69.
- Ratnam, K. J. 1965. *Communalism and the Political Process in Malaya*. Kuala Lumpur: Universiti Malaya Press.
- Russel, Fifield. 1975. The Concept of Southeast Asia: Origins, Development and Evaluation. *South-East Asian Spectrum* 4(1): 43-51.
- Rustam A. Sani; and Norani Othman. 1991. The Social Sciences in Malaysia: A Critical Scenario. *Ilmu Masyarakat* 19: 1-20.
- Said, Edward W. 1979. *Orientalism*. New York: Vintage Books. (エドワード・サイード. 1986. 『オリエンタリズム』板垣雄三；杉田英明（監修），今沢紀子（訳）. 平凡社）
- 酒井直樹. 1996. 『死産される日本語・日本人——「日本」の歴史・地政的配置』東京：新曜社.
- Sanusi Osman. 1984. Ikatan Etnik dan Kelas. In *Kaum, Kelas dan Pembangunan Malaysia*, edited by Syed Husin Ali, pp. 43-61. Kuala Lumpur: Persatuan Sains Sosial Malaysia.
- 関根政美. 1994. 『エスニシティの政治社会学——民族紛争の制度化のために』名古屋：名古屋大学出版会.

- Shaharil Talib. 1997. Colonial Knowledge and Malaysian Society: Reappropriating the Epistemological Space. Paper presented at 1st International Malaysian Studies Conference. University of Malaya.
- Shamsul A. B. 1996. Debating about Identity in Malaysia: A Discourse Analyses. In *Mediating Identities in a Changing Malaysia*, edited by Zawawi Ibrahim. *Southeast Asian Studies* 34(3): 8-31.
- . 2001. Social Science in Southeast Asia Observed: A Malaysian Viewpoint. *Inter-Asia Cultural Studies* 2(2): 177-198.
- Silcock, Thomas H. 1961. *Towards a Malayan Nation*. Singapore: Donald Moore for Eastern University Press.
- Syed Husin Ali. 1984. Social Relations: The Ethnic and Class Factors. In *Kaum, Kelas dan Pembangunan Malaysia*, edited by Syed Husin Ali, pp.13-31. Kuala Lumpur: Persatuan Sains Sosial Malaysia.
- Tan, Chee Beng. 1982. Ethnic Relations in Malaysia. In *Ethnicity and Interpersonal Interaction: A Cross Cultural Study*, edited by David Y. H. Wu, pp.37-61. Singapore: Maruzen Asia.
- . 1984. Acculturation, Assimilation and Integration: The Case of the Chinese. In *Kaum, Kelas dan Pembangunan Malaysia*, edited by Syed Husin Ali, pp.189-211. Kuala Lumpur: Persatuan Sains Sosial Malaysia.
- Tham, Seong Chee. 1984. *Social Sciences Research in Malaysia*. Singapore: Graham Brash Ltd.
- Tregonning, K. G. 1964. *A History of Modern Malaya*. London: University of London Press.
- Vasil, Raj. K. 1971. *Politics in a Plural Society*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Wan Hashim. 1983. *Race Relations in Malaysia*. Kuala Lumpur: Heinemann Educational Books.
- Wilkinson, Richard James, ed. 1907-11. *Papers on Malay Subjects, First Series*. Kuala Lumpur: Federated Malay States Government Press.
- Winstedt, Richard O. [1948]1966. *Malaya and Its History*. London: Hutchinson University Library
- 山之内 靖(編). 1995. 『総力戦と現代化』東京：柏書房.
- 矢野 暢. 1987. 『地域研究』東京：三嶺書房.
- . 1993. 「地域研究とは何か」『地域研究の手法』（講座現代の地域研究1）矢野暢（編），3-22 ページ所収.
- 油井大三郎. 1989. 『未完の日本占領改革——アメリカ知識人と捨てられた日本民主化構想』東京：東京大学出版会.
- Zawawi Ibrahim, ed. 1996. *Mediating Identities in a Changing Malaysia*. *Southeast Asian Studies* 34(3).